

文||福永無想

明治5(1872)年、榎子が初めて見た東京は、その想像をはるかに超えていた。人の多さや街の活気といい、いまだ江戸時代の名残は随所に残っていたものの、熊本の匂いや音とは全く違うものだった。

明治5(1872)年、榎子が初めて見た東京は、その想像をはるかに超えていた。人の多さや街の活気といい、いまだ江戸時代の名残は随所に残っていたものの、熊本の匂いや音とは全く違うものだった。

その頃、兜町には第一国立銀行の近代的な建物が建設中であつた。翌年に設立された銀行の総監役に就いたのは、後に「近代日本経済の父」と呼ばれた渋沢栄一である。兄・源助の家は神田の猿樂町さるがくちやうにあつた。

この頃の源助は左院議官※として立法府の高官の職に就き、800坪なる大邸宅に多くの書生や食客を抱えていた。楳子は到着するやいなや献身的に源助を看病した。そして、その枕元で改名したことを告げる。

「お前らしい、いい名前だ」

相変わらず理解ある返事である。それからしばらくして源助は快復し役職に戻った。

それにしても、猿樂町の家に入ってからというもの、楯子には氣にくわなことが山ほどあった。まず、書生らには緊張感が

皆無で、自由勝手に振る舞っている。それに女中らはおしゃべりばかりして、掃除は行き届かず、食費や生活費の無駄使いも多かった。源助が元気になるまではと目をつぶってきたものの楯子の性格である、黙って見過ごせるはずがない。

さらに梶子を驚かせたのが、矢嶋家の家計がひつ迫していたことだ。源助は高給取りであるにもかかわらず、多額の借金をこしらえていた。その原因は、金に執着しない放漫な金銭感覚にあった。そこで、梶子の改革が始まった。

「お女中の方々は残らず、お暇を取つていただきます。それから何もしない、いや何もできない書生さんは、この家から出て行ってもらいますけん。よかですね」

情は容赦ない、とはこのことであろう。榎子は女中の仕事を書生らに分担すると、必要のない出費は一切認めず、とことん家計を切り詰めていった。

実は楯子には、幼い頃から付けられたあだ名があつた。「渋柿、渋ちん」。儉約家で合理性を重んじる性格といえは聞こえはいいいが、つまりは「どけち」なのである。「無駄は、何事も罪」と常日頃から口にし、一切の妥協を許さない楯子の猿樂町における改革では、まさにその渋柿ぶりが發揮されたわけである。

「相変わらずの渋柿ぶりだ」

陰で苦笑いをしながらも源助は、日々張り合いを感じながら、まるで水を得た魚の

ように生き生きとした妹の姿に安堵した。
そしてわずか三年余りで、梶子は壹千円もの
源助の多額の負債を片付けていくのだった。

「教員になる気はないか」

源助は楯子に、文部省が教員養成のために設置した、小学校教員伝習所に入学することを薦めた。楯子にすれば思いがけないことだったが、姉の順子の元で子どもに読み書きを教えたり、矢嶋の実家で寺子屋を開いてきたことをもつてすれば、別世界の話というわけではない。楯子の胸に「自立」の思いが沸き起こる。それは次第に膨らみ、これまでの人生を巻き返せる気がしてくるのだった。

「兄さま、**齡40を過ぎた身**なれど、やつてみ
とうございます」

早速、教員伝習所に入學した楯子は、わが子と同じ年頃の女学生らと机を並べた。生來の向學心に燃え、1年後には教員資格の免許を取得した。もとより漢学の素養は豊かで、手跡も美しい。それに、高官の源助の妹であることも採用の決め手となった。

明治6(1873)年、楫子は芝の桜川町にある桜川小学校の教壇に立った。

「こげんよう。担任の矢嶋楯子です」
声高らかに児童にあいさつをし、楯子は人生を巻き返すための一歩を踏み出した。

※左院議官／廃藩置県後の官制改革で設けられた機関の議員

※この物語は、矢嶋楯子の資料をもとに描いたフィクションです



※()は30人以上の団体割引料金

